

コラム 07— 山鹿素行の国家観

山鹿素行（写真）は、1622 年元和 8 年に福島県会津に生まれ、31 歳で赤穂藩に仕えて大石蔵之助はじめ多くの赤穂藩士に多大な影響を与えた山鹿流軍学者として有名であります。山鹿素行は著書である「山鹿語類」の中で、日本固有の伝統として天皇崇拝に重要な意義を認め、尊皇攘夷思想をまとめられました。この「山鹿語類」の中に、国家社会のあるべき姿として「五倫の道」というものを説いています。その内容は簡単にいうと、「天地が陽である天と、陰である地とからなっているように、人も陽と陰との形を備えたものをそれぞれ男と女とし、天下はこうした男と女から成り立っている。したがって先ず男と女すなわち夫婦の和というものが大事であり、これが第一の倫（ともが）らである。そして夫婦の和の中で子供が生まれ、次に親子の和が生じ、これが第二の倫らである。さらに子供達の間で、兄弟、姉妹の和が大事になり、これが第三の倫らである。この三倫の和がしっかりすることにより、家族の和が成り立つ。そして社会というものは、家族の集まりであるから、社会の中での家族同士の和というものが大事であり、これが第四の倫らである。しかしながら、元来、欲のある人間にとってこれを実践していくことはなかなか難しく、従って社会の和、家族の和がしっかりするためには、この四つの倫らを自らが実践できる徳の高い君主が必要であり、国家社会の家族 1 人 1 人と徳の高い君主との間の倫らが第五の倫らである。この五倫の道を君主とともに究めた道義国家こそが、人類における最も安定した国家社会と言えるのである。」



山鹿素行

日本はこのような国家社会を目指すべきであるとして、徳の高い君主、すなわち天皇について、山鹿素行は次のように述べております。

「我が国の天皇家の祖先である天照大神の神明の徳は、天下を照らし、一木一草に至るまで、その恵みを及ぼしたのであり、その家がかやぶきであったことも、その召し上がりものが 3 度きねでついただけの米であったことも、すべて民の迷惑や国の費用を考えられたからのこと、その住居のかつお木も垂木もまっすぐで曲がっていなかったのは、人の心の素直であることを示したものであった。そのすべてのものに等しく恵みを及ぼすところの徳がこのようなものであったからこそ、代々の天皇は人民の上に君主とし、師として仰がれたのである」とし、そしてこのような徳を備えた君主を中心とした日本の国家形態が、日本の最も誇るべき中心的伝統と言えるものであると述べているのです。

※ この山鹿素行の国家観が、明治 23 年に下賜された教育勅語に強い影響を与えたといわれています。